

『ポーランド問題と社会主義運動』序文

ローザ・ルクセンブルク 著

丸 山 敬 一 訳

訳者はしがき

ローザ・ルクセンブルクは、1905年にポーランド問題に関する何人かの権威たちによって書かれた論文を集めてポーランド語に翻訳し、『ポーランド問題と社会主義運動』なる一冊の論文集を編纂し、みずからその序文を書いた。この論文集編纂の目的は、著者自身書いているように、ポーランド独立に賛成のものも反対のものも含めて、当時表明されたすべての見解を何ら変更を加えることなく、いささかも出来合いの結論を押しつけることなく提供し、読者が独立してこの問題——ポーランド労働運動にとって死活の重要性を持っている問題——に対して自由に判断をくだすことができるよう意図したものであった。ここに邦訳したものはその序文の全文である。この論文集の正式の名称は、“Kwestja polska a ruch socjalistyczny. Zbiór artykułów o kwestji polskiej R. Luxemburg, K. Kautsky’ego, F. Mehringa, Parvusa i innych”, 1905, Kraków. (『ポーランド問題と社会主義運動, R. ルクセンブルク, K. カウツキー, F. メーリンク, パルヴスその他の人々によるポーランド問題論説集』) であり、以下にかかげる20篇の論文を含んでいた。()内の数字は原本のページ数。

1. Nowe prądy w polskim ruch socjalistycznym w Niemczech i Austrii (ドイツおよびオーストリアにおけるポーランド人社会主義運動の新しい潮流) ……Róża Luxemburg (Die Neue Zeit. 1895/96. T. II.) (1)
2. Socjalizm w Polsce (ポーランドにおける社会主義) ……S. Hae-

- chera (Kraków) (Die Neue Zeit. 1895/96. T. II.) (17)
3. Socjalpatryjotyzm w Polsce (ポーランドにおける社会愛国主義)
……R. Luxemburg (Die Neue Zeit. 1895/96. T. II.) (26)
4. Finis Poloniae? (ポーランドの終末?)……Karol Kautsky (Die
Neue Zeit. 1895/96. T. II.) (37)
5. Kwestja polska (ポーランド問題)……Parvus (Sächsische Ar-
beiterzeitung. 25. 7. 1896.) (57)
6. W kwestji taktyki polskiej socjaldemokracji (ポーランド社会
民主党の戦術問題によせて)……anonim (Vorwärts. 15-17. 7.
1896.) (62)
7. W kwestji taktyki polskiej socjaldemokracji (ポーランド社
会民主党の戦術問題によせて)……Plechanow (Vorwärts. 23. 7.
1896.) (70)
8. W kwestji taktyki polskiej socjaldemokracji (ポーランド社会
民主党の戦術問題によせて)……R. Luxemburg (Vorwärts. 25.
7. 1896) (72)
9. Odbudowanie Polski czy obalenie caratu? (ポーランド再建か
ツァーリズム転覆か)……B. Kriczewski (Leibziger Volkszeit-
ung. 23. 7. 1896.) (75)
10. Niepodległość Polski na międzynarodowym Kongresie socja-
listycznym w Londynie (社会主義インターナショナル・ロンドン
大会におけるポーランド独立)……List prof. Ant. Labrioli oraz
odpowiedź Critica Sociale (Critica Sociale. 16. 5. 1896.) (79)
11. Kwestja Polska na międzynarodowym Kongresie w Londynie
(インターナショナル・ロンドン大会におけるポーランド問題) …
…R. Luxemburg (Critica Sociale. 16. 7. 1896.) (83)
12. Krok za krokiem. Przyczynek do historii i klas burżuazyjn-
ych w Polsce (一段, また一段. ポーランド・ブルジョア階級の歴

- 史によせて) …R. Luxemburg (Die Neue Zeit. 1897/98. T. I.)
(89)
13. Socjalizm w Polsce (ポーランドにおける社会主義) …R. Luxemburg (Sozialistische Monatshefte. x. 1897.) (101)
14. Karol Kautsky o kwestji polskiej (ポーランド問題にたいするカール・カウツキー) … (Die Neue Zeit. 1901/02. T. II.) (109)
15. Kwestja Polska (ポーランド問題) ……F. Mehring (Aus dem literalischen Nachlaß von K. Marx, F. Engels u. F. Lassalle. T. III.) (119)
16. Po latach czterdziestu (40年後)(Artykuł redakcyjny z Iskry. II. 1903.) (123)
17. Kwestja narodowa w naszym programie (我々の綱領における民族問題) (Artykuł redakcyjny z Iskry. VII. 1903) (126)
18. Jeszcze raz Karol Kautsky o kwestji polskiej (重ねてポーランド問題にたいするカール・カウツキーについて) (Die Neue Zeit. 1903/04. T. I.) (132)
19. Socjalpatriotyczne łamńce programowe (社会愛国主義綱領のアクロバット性) ……R. Luxemburg (Przegląd Socjaldemokratyczny. 1902.) (137)
20. Nacjonalistyczna Robinsonada(社会愛国主義のロビンソン物語) …R. Luxemburg(Przegląd Socjaldemokratyczny. 1903.) (151)
- Uwagi Wydawców (編者注) (168)
- Dodatek Sprawozdanie na III międzynarodowy Kongres socjalistyczny i robotniczy w Zurychu. 1893. (付録, 1893年の第III回社会主義インターナショナル・チューリヒ大会での報告) (174)

この序文執筆当時の事情については、ローザ・ルクセンブルクの1905年

5月7日付ヨギヘス宛書簡が詳細に伝えている。

「ポロニカ（『ポーランド問題と社会主義運動』のこと——訳者）の序〔文〕を同封して送ります。……わたしの感じでは、序文はすばらしい出来としかいいようがありません。わたしたちが話していたような大幅な改訂などは、とても考えられぬほど。少なくとも不必要です。というのも、そこでは、たくさんのことが落ち着いた筆致で、徹底的に説きあかされているからです。これはとても読者の役に立つでしょう。読者を教え、情況について判断する材料をあたえることになります。ただ心配なのは、マルクスと対立するわれわれの立場をあまりにも強調しすぎている点ですが、この心配も、わたしに言わせれば、とりこし苦勞でしょう。このことでは、それこそまったくだれ一人として、おぞけをふるったりするものなどあるわけがありませんし、それに全体としてみれば、結局のところ、マルキシズムの勝利の歌なのですからね。また、率直な「修正意見」は、わが国の青年をむしろいっそう魅惑する結果になるのではないのでしょうか。

つぎに、1896年に生じたPPSとのいざこざを、なにもかもすっかり、正確に物語っているところなど、まったく時宜にかなったものだと思います。なにしろ、あの議論の重要性は少しばかり誇張したほうがいいのですからね！ ひょっとして忘れていたのじゃありませんか——この前書きのことをもう前まえから考えるたびに、わたしたちは、なによりもまず、ヨーロッパにおけるポーランドの伝統というものを検討することがじつにどれほど重要か、そのことを青年に分からせるのを最大の目的にしようとしたんじゃないですか。あのようなひどい事件を説明するために、われわれは、もう10年もまえに、ドイツ語はもとより、フランス語、イタリア語まで使ってはげしくPPSと論争したのでしょう。でも、きょうという日になるまで、ポーランド語ではなにも出ていなかったんですからね。いまなら、ちょっとした反響をよぶでしょう——それも、わたしに言わせれば、いい反響を。

つぎに、いちばんかんじんなこと——全体の筆致は、声ばかり高い攻撃

的なものでもなければ、破壊的なものでもありません。しかし、そのかわり——わたしはこう確信しています——知識層にはきっとすばらしい印象を与えるにちがいありません。」(『ヨギヘスへの手紙』, 第三巻, 河出書房新社, pp. 189—192)。

彼女は追伸の中でも重ねて「この序文を初めからしまいまで、もう一度、すっかり読みなおしてみたのですが、やはり、すばらしい出来ばえだという確信をふたたびいだかされたようなことです」と述べている。ローザ・ルクセンブルクがこの序文に対してどれほどの自信を持っていたかが知られるであろう。

私は4年程前、ローザ・ルクセンブルクの民族問題に関する論文を8篇ほど邦訳編集して出版したことがある(『マルクス主義と民族問題』 福村出版 1974)。その際、この序文も是非とも収録したいものと考えたが、さまざまな事情のため果せなかった。その折下訳しておいた訳文に多少手を加えて今回『中京法学』に載せることにした。『中京法学』第12巻第2号と第13巻第1号とには佐保雅子氏の翻訳になるローザ・ルクセンブルクの唯一のロシア語論文といわれる「ポーランドとロシアの社会主義の相互関係」が連載されている。ルクセンブルクが、ポーランド民族とロシア民族との関係を民族問題の次元でどう考えていたか、またロシアの党とポーランドの党の相互関係を党組織論の次元でどう考えていたかは、彼女の思想を知る上できわめて重要なポイントである。私の拙ない訳文を佐保氏の翻訳に続けて載せることによって、このテーマの究明の上に多少なりとも資するところがあれば訳者の望外の喜びとするところである。底本として用いたのは Jürgen Hentze による独訳——Vorwort zu dem Sammelband “Die Polnische Frage und die Sozialistische Bewegung” (Rosa Luxemburg, Internationalismus und Klassenkampf, Hrsg. u. eingeleitet v. Jürgen Hentze, Luchterhand, 1971. SS. 179-219)——である。また最近、ドイツ語版をもとにして H. B. Davis が英訳を出版した——The National Question, Selected Writings by Rosa Luxemburg, Edited

and with an Introduction by Horace B. Davis, (Monthly Review Press. New York and London, 1976, PP. 60-100) ——ので、これを参照した。いづれにせよ、この翻訳は重訳であることをお断りしておく。

末筆ながら、この論文集の目次のコピーをお寄せいただいた伊藤成彦氏、訳者の質問に快くお答えいただいた多くの方々に厚くお礼を申し上げます。

原注は一ヶ所だけ一部省略したほかはすべて訳出した。訳注は必要最少限度にとどめた。

『ポーランド問題と社会主義運動』序文

種々の定期刊行物の中で、さまざまな言語により、さまざまな時に、さまざまな著者によって論じられたポーランド問題にかんする諸論文の集成である本書には、事実、「書物は自己の運命を持つ」という言葉がふさわしいであろう。実際、本書はポーランド社会主義の精神史の一局面を含むものであり、ポーランド社会主義者の政治綱領の問題をめぐって国際的な出版物の中で展開された討論というきわめて特殊な現象の概観を我々に提供するものである。この討論は主として1896年の社会主義インターナショナル・ロンドン大会の際に始まったものである。

ポーランド社会主義者の国内問題が、ヨーロッパの論壇に移され、国際社会主義の判断にゆだねられることになったのは何ら偶然なことではない。むしろさまざまな国の労働者党の戦術についての意見交換は、社会主義インターナショナルの中で近年ますます流行になってきている。たとえば、ジョレス^①主義の歴史や1902年4月のベルギー労働者党のゼネスト^②の例がそうであるが、これらはドイツ、オランダ、ロシアその他の国々の出版物の中で活発な討論を呼び起した。とりわけ、2～3年前から全てのインターナショナルな運動の中で目にみえるものとなり、いたるところでほとんど相似た現象と、革命陣営からの相似た反撃を呼び起している日和見主義的潮流は、さまざまな国の同様なグループの間に特別な精神的親交を作

り出し、その本来の性格からいえば社会主義運動を民族的・地域的に分裂させる傾向を内包しているにもかかわらず、反対に、インターナショナルな連帯のますます緊密な結びつきを作り出しているのである。ともかく、ポーランド社会主義運動もまた、ポーランド民族問題に関して、国際社会主義との特殊な結びつきの中にあつたし、現在もある。

ポーランド人の蜂起が、西ヨーロッパの民主主義者の戦列の中に熱狂的な共感をよびおこしたのは何ら不思議なことではない。西ヨーロッパにおける民主主義の問題は単に同情の絆によってのみならず、とりわけ政治的利害の絆によってポーランド問題と緊密に結びついていた。ロシア・ツァーリズムが「神聖同盟」の形で、国際的反革命の憲兵として、ヨーロッパ内部の政治に介入するようになって以来、フランスの民主主義者たち、とりわけドイツの民主主義者たちは、ツァーリズムをみずからの敵として考慮に入れなければならず、それをうちのめすことがヨーロッパ革命成功のための条件となつたのであつた。しかし、ロシア社会内部にはいまだいかなる革命的徴候も認められないのであつた。19世紀の初頭、半ば、あるいはそれ以後におけるこの種の行動の最初の現われ——たとえば、デカブリストの運動やカラコーゾフによるアレキサンダー2世暗殺未遂事件^③などは、突如として噴出したものであり、ただツァーリ帝国の希望なき野蛮な暗黒状態をそれだけはっきりと照し出してみせたにすぎなかつた。したがって、武装したポーランド人の蜂起が西ヨーロッパの人々の目からみれば唯一の革命的要因としての役割を演じているように見え、しかもそれがロシア絶対主義の力を消耗させ、西ヨーロッパにおける民主主義革命を防衛するという意味をもっているようにみえたのは何ら不思議なことではない。

かくして、この観点からロシアおよびポーランドに対するドイツ民主主義者の立場が形成されたのであるが、この立場の急進的な、最も首尾一貫した主張者は『新ライン新聞』におけるカール・マルクスであつた。周知のように、ポーランド蜂起のよびかけとロシアへの宣戦布告の思想は、三

月革命期のマルクスの外交政策の核心であった。当時の革命的民主主義者の最も急進的な左翼に所属していたマルクスは、この問題においてもまた、大胆にも防衛戦術から攻撃戦術に転じ、ドイツに侵入してくるツァーリズムとの衝突を待つのではなく、むしろロシアに対する戦争と蜂起の炬火をみずからかけ、直ちにツァーリズムに挑戦することをよびかけたのであった。

ここは、この戦術がどの程度まで成功の見通しを持っていたか、また当時なおどの程度まで現実的基盤の上に立脚していたかといった分析に立入るべき場所ではない。ここで我々が確認しておかなければならない唯一のことは、国際社会主義の中に後に継承されていくことになったポーランド問題に関する伝統は、まさにここを源泉にして発生しているという事実だけである。社会主義的な理論や戦術ではなくして、ドイツの民主主義者の現実政策、西ヨーロッパのブルジョア革命の実際の利害が、マルクスの、後にはエンゲルスの、ロシアおよびポーランドに対する立場を根拠づけていたのである。ところが、この立場はひと目みれば明らかなように、マルクス主義の社会理論との内的な関連を欠いているのである。なぜなら、そこにおいては、マルクス主義社会理論の最も内的な核心に逆って、ポーランドもロシアもともにその内部に経済的・政治的矛盾を内包した階級社会として分析されておらず、歴史的発展の視点からではなく、固定した絶対的な状態として、同質の分化せざる統一体として理解されていたからである。当時の西ヨーロッパの民主主義者にとっては、ポーランドは叛徒の国であり、ロシアは反革命の国であって、それ以外の何ものでもなかった。ポーランド反乱の社会的背景、経済的基盤、政治的内容といった問題は、ブルジョア民主主義者たちにとっても、ドイツの社会主義者たちにとっても存在せず、ほとんど考慮されることがなかった。それがどれ程考慮されなかったかは、1875年にいたってもなおエンゲルスは『フォルクスシュタート』誌にのせたトカチョーフへの回答において、ロシア絶対主義の土台をゆるがす諸要因を数え上げて、「第一はポーランド人である」と述べて

いるところからも明らかである。

現実には、「ポーランド人」すなわち、その唯一の仕事がいわゆるポーランド独立のための闘争であったあの単一な民族は、仮りにかつて存在していたことがあったにしても、エンゲルスがこの文章を書いた時点には、もうとうの昔に存在することをやめてしまっていたのである。というのは、ポーランドは当時まさに「有機的労働」の綱領にもとづく最大の乱痴気騒ぎの時代であり、ポーランド人の生活における民族運動と貴族時代の廃墟の上で、資本主義的致富の気ちがいじみた乱舞のみられた時代であったからである。そののちまもなく、2～3年後には、ポーランドが「ポーランド人」の国であることをやめ、階級対立と階級闘争によってひきさかれた完全に近代的なブルジョア社会になったことの明白な証拠として、ポーランドの社会的な舞台の上にはじめて社会主義運動が登場してくることになるのである。

ポーランドに関する伝統的見解は、国際社会主義の中で長期にわたって休眠することとなった。最後の蜂起ののち、民族闘争のトランペットは急に沈黙し、資本主義ポーランドは剣戟のひびきによってヨーロッパの注目を引くことをやめ、「諸君、金持になりなさい」というブルジョアジーの叫び声はいたるところで静穏と平和を要求し、日陰のすみれのようにつましく隠れて生きることを望み、ただひたすら隣人の嫉妬深い目を避けようと努めたのである。他方、ポーランド社会主義者もまた、その最初の登場の瞬間から、単に彼らの政策をこの蜂起の伝統に結びつけようと努力しなかつただけでなく、むしろ反対に、十分な自覚と決意とをもってポーランド社会におけるこの伝統と対決し、国際社会主義の戦列の中においてもこの伝統にたよることをしなかつたのである。事実、ポーランドにおいてまじめに受取らるべき最初の社会主義組織である「プロレタリアート」党は、よく知られているように民族運動に対する敵対とそれに対する鋭い批判とを、みずからの階級的立場の出発点としたのである。ポーランド問題についてのマルクス、エンゲルスの見解が「プロレタリアート」党の創立

者および理論的指導者に知られていなかったわけでは全くない。しかし、彼らはそれによって少しも惑わされることなく、むしろこの見解をポーランド内部の民族運動の社会的內容および最後の蜂起以後にこの国に起った社会的變化に対する無知にもとづく古い見解の残滓とみなしたのである。1880年11月に「ルフノシチ」^⑥グループ、すなわち、ルドヴィク・ヴァリンスキ、スタニスワフ・メンデルソン、シモン・ディクシュタインその他の同志が、自分たちの反民族主義的立場を明確にするために、ジュネーブで11月蜂起の50周年記念の国際會議を催した時、彼らは他の人々からの手紙や電報とともに、マルクス、エンゲルスからの手紙をも受取ったのである。その手紙は、次のような言葉で、ポーランド独立のスローガンと西ヨーロッパの革命との歴史的關連を簡潔に総括していた。「当時西ヨーロッパ全体にひびきわたった『ポーランド万歳！』の叫び声は、狂暴な力で抑圧された愛国的な戦士に対する同情と賛嘆の表明だけではなかった。この叫び声は、そのあらゆる蜂起——自分自身にとってはあれほど悲惨なものに終った蜂起——がつねに反革命の攻勢を押しとどめてきた民族、その最良の息子たちがいたところで人民革命の旗のもとにたたかい、けっして武力抵抗をやめることのなかった民族への挨拶でもあった。他方では、ポーランド分割は神聖同盟を、ヨーロッパのあらゆる政府に対するツァーリの指導権をおおいかくすこの仮面を、強化した。それゆえ、『ポーランド万歳！』の叫び声はおのずから次のことを語っていたのである。神聖同盟に死を、ロシア、プロシア、オーストリアの軍事的専制に死を、現代社会に対するモンゴルの支配に死を。」この手紙は次の言葉で終わっている。「こうしてポーランド人は、自国の国境のそとで、プロレタリアートの解放のための闘争において大きな役割を演じた。——彼らは主として、この闘争の国際的戦士であった。この闘争がポーランド人民自身の内で展開されつつある今日、宣伝や革命的出版物によってこれを支援し、これをわがロシアの兄弟たちの努力と結合させようではないか。それは、古くからの叫び声『ポーランド万歳！』をくりかえすもう一つの機会となるであろう。」^(一)

この手紙に対する回答として、ルドヴィク・ヴァリンスキは、この会議で包括的な演説をして、とりわけ次のように語った。

「……あらゆる労働する人民に一つの旗、すなわち世界革命の旗のもとでの闘争を呼びかけているインターナショナルの前に三帝同盟が立ちふさがっている。ところが、インターナショナルは、この反動に抵抗するだけの力が自分たちにあるとは思っていないので、ポーランド問題をプロレタリアート解放の一般的綱領に従属させようと努力してはいないのである。ポーランドの革命的な愛国者たちこそ、ヨーロッパの反動を支援するために進出するツァーリを阻止することができる、ロシア帝国内の唯一の同盟者であると信じられてきたのである。長期にわたって、インターナショナルな運動における我々の任務は、この役割に限定されてきた。共産党宣言の起草者でさえ、その不滅の合言葉『万国のプロレタリアート、団結せよ』を、もう一つの、ブルジョアジーをも、特権階級さえをも引きつけることのできる合言葉『ポーランド万歳！』に結びつけている。搾取者のポーランドであれ、被搾取者のポーランドであれ、ともかくポーランドに対するこのような尊敬と共感の表明は、ポーランドの弁護者たちの頭の中では、以前の政治的組合せが今日でもなお意味を持っているということの証明である。しかし、この政治的組合せは、徐々にその意味を失ないつつあり、まもなく忘れ去られてしまうであろう」。

ヴァリンスキはまちがっていた。ポーランドの伝統は、国際社会主義運動において、なるほど一時忘れ去られてはいたが、この伝統を生みだした歴史的諸条件が根底から変化してしまった後においてもなお、決して消え去ってしまったわけではなかった。イデオロギーというものはすべて保守主義によって特色づけられる。労働運動のイデオロギーといえども、その世界観の徹底した革命性にもかかわらず、この法則をまぬがれるものではない。その個々の見解において、労働運動のイデオロギーもまた、諸関係の現実の発展にかなりおくれをとるものであり、時々の根本的な修正によってはじめて現実の発展に適合させられうるのである。ところが、社会民

主党は、政治闘争のための党であって、抽象的真理認識のための哲学的探究の党ではない。したがって、党は労働運動の明白な利害が、古くさくなつた見解の修正を要求しないかぎり、通常そのような修正にかかわり合うことはしないのである。かくして、しばしば伝統的見解は、それに照応する社会的諸関係がとうの昔に舞台から姿を消してしまっているにもかかわらず、手を触れられることなく社会民主党の金庫の中に長期にわたってしまいかまれているのである。発展によって生じた運動の新しい要求が、古くさくなつた伝統との明白な矛盾に陥り、それと衝突するようになってはじめて世論がそれを告発し、根本的な批判を加えることになるのである。

ポーランド問題に関する社会主義者たちの伝統的見解についても同じことが起つた。この見解は精神の中には保持されていたが、現実政治の中では全くとりあげられなかった。この伝統的見解をふたたびとりあげることのできるようなポーランド民族運動はもはや存在せず、ポーランド社会主義者たちは、我々がすでにみたように、この見解を完全に無視し、何びとも考慮することなく、厳格な反民族主義的政策を追求することによって、この見解を片づけてしまったのである。

しかし、1893年にポーランド社会党によって代表される社会愛国主義的潮流が舞台に登場した時には、状況は全く変わってしまっていた。なるほど、以前にもポーランド社会主義運動をポーランド再興の綱領と結びつけようという試みはなされた。たとえば、1881年の「ルート・ポルスキ」と1889年の「ポブトカ^①」のグループがそうであるが、これらはいずれもB・リマノフスキ^②の庇護のもとにあったものである。しかし、これら二つの短命なグループは国際社会主義からの孤立をみずから強く感じていたので、自己の立場をマルクス主義の伝統と結合させようといういささかの努力も払わなかった。彼らがその綱領の根柢を、近代社会主義理論に求めず、奇妙な感傷的一形而上学的用語に求めていたがゆえにとりわけそうであった。

「ポーランド社会党」がはじめて、1848年のマルクスの政策の打ち捨て

られていた遺産をよみがえらせ、復活させようとする試みを、しかもあらゆる犠牲を払ってしたのである。この遺産は、西ヨーロッパの社会主義者の間をうろつきまわっていたポーランドの伝統を利用するために、ひとつの完全な体系にまで仕上げられ、流布された。その見本を読者は、本書の中の、とりわけクラクフのヘッカー氏の論文^⑨の中に見ることができるであろう。この体系は、かつて我々の一同志が適切にも表現したように、西ヨーロッパ社会主義のあらゆる権威者たちが表明した「ポーランド再興の保証書」の集積からなるものである。そして、この保証書たるや、同じく本書に収録されているアントニオ・ラブリオーラの手紙が示しているように、フランス、イギリス、イタリア、ドイツその他の国々の社会主義者たちに「全ポーランドの社会主義」がポーランド再興を「欲している」と確言し、前もって、彼らにこの努力に対する共感の表明を要求することによって得られたものである。このようにして、既成事実の前におかれて、その言語も行動の諸条件も知らない外国の党の綱領の合理性や非合理性に頭をなやますこともなく、西ヨーロッパの社会主義者たちは、当然のことながら、要求された「保証書」を与え、よく考えもせずに注文された手紙や論文を書き、折にふれて、始めからこの目的のために招待された集会で、ひとことふたことポーランド再興に賛成の言葉を述べたのである。

かくして、国際労働運動の著名人たちが、社会愛国主義に対して与えた保証書が、うまずたゆまずかき集められて、1895—96年にこの傾向を代表する文献の中で——1896年のメーデー特別号の中で、『プシェドシフィト』の諸論文や『ガゼタ・ロボトニッチャ』の中で——果てしなくくりかえされる空文句となった。マルクス、エンゲルス、リープクネヒト、ベーベル、カウツキー、ベルンシュタイン、ゲード、ラブリオーラ、ハインドマン、エレオノーラ・マルクス・エイヴリング、モッテラー、レスナー等々、等々が、ポーランド再興の熱狂的な支持者として、社会愛国主義の文献の中でたえず取り上げられ、西ヨーロッパの出版物におけるこの伝統をよみがえらせる機会を残らず利用された。

この奇妙な現象は、決して偶然の産物でもなければ、社会愛国主義の主張者たちの悪趣味の産物でもない。1893—1894年にポーランド労働運動の戦場にはじめて登場したこの潮流は、とりわけポーランド自体の中に最高度に敵対的な基盤と敵対的な雰囲気とを見出さねばならなかった。ポーランドの社会主義者サークルの見解が、「プロレタリアート」党の精神、すなわち、徹底した反民族主義の精神にもとづく「ルフノシチ」と「プシェドシフト」^⑩の15年間にわたる活動によって形成されてきた後では、ポーランド再興の綱領によって開始されたこの突然の戦線変更は最大の敵意をもって迎えられたのである。「プロレタリアート」党によって確立された理念からすれば、「愛国主義」と貴族蜂起の古い合言葉に忠誠を誓うことは、まさしく社会主義の旗および階級闘争の立場に対する裏切りであった。このような敵対的な雰囲気と、しっかり根を下した「プロレタリアート」党の伝統とを克服するためには、新しい綱領を社会主義運動の階級的視点から一貫して根拠づけることがどうしても必要であった。しかし、そのような根拠づけは、たとえソロモン王といえども不可能であったろう。なぜなら、社会愛国主義は——「何もないところでは王といえどもその権利を失う」と諺にもいうように——決して根拠づけることのできないものだからである。この「労働者」綱領をとりつくろうために当時なされた有名な解釈は、独立ポーランドの憲法は、ツァーリズム崩壊後に制定されるかもしれないロシアの憲法に比べれば、きっと「より民主的な」ものであろう、というものであったが、この解釈は、明らかにただ三流四流の同調者たちの控え目な精神的要求をみたしうるものにすぎなかった。したがって、この困難からの最も簡単な出口は、国際社会主義の伝統に訴えることであり、マルクス、エンゲルスおよび、その後につづく著名な社会主義者たちの名前をひきあいに出すことであった。社会愛国主義的綱領を根拠づける代りに、社会主義の高等法院における一連の著名な名前のリストが提出されねばならなかった。これによって、ポーランド再興の要求は、社会主義に対する裏切りだという烙印をまぬがれることができるのである。な

ぜなら、ヨーロッパの運動の最も経験を積んだ理論家や実践家が、この合言葉に賛意を表明しているからである。また、ポーランド社会党の綱領は「マルクス主義」の直接の承認を得ていることになる。なぜなら「マルクスその人」が、この合言葉の正しさを保証しているのだから。かくして、それ以後は、社会愛国主義への戦線転換に関するポーランド社会主義サークルのあらゆる疑問、懸念、嫌悪は、マルクス、エンゲルス、リープクネヒト、ベーベル、エレオノーラ・エイヴリング、ラブリオーラ等々、あるいは順序を逆にして、ラブリオーラ、ベーベル、リープクネヒト、エンゲルス、マルクス、等々からの単なる空文句の朗読によってかたづけられた。

ちょっと考えてみれば、この種の問題解決は、きわめて素朴な、二重の偽瞞にもとづいたものであることが分るのであろう。外国の社会主義者たちは、全ポーランドの労働運動はポーランド再興をもはや疑問の余地なき綱領とみなしているという誤った信念に導かれ、それを根拠にして、この綱領に対する共感を表明しているのである。しかし、他方では、ポーランド社会主義者の意見もまた、このようにして得られた外国社会主義者の共感表明によって、ポーランド社会主義者が、ポーランド再興のために積極的に努力することを、あたかも国際社会主義運動全体が緊急に要求しているかの如き誤った信念へと導かれているのである。どちらの場合にも、この政策は社会愛国主義に対するあらゆる批判的評価を麻痺させ、もっぱら、権威——ヨーロッパでは、ポーランドの全労働運動の権威、ポーランド自体では、マルクス、エンゲルスなどの偉大な名前の権威——の力に依拠することによって維持されているのである。

我々がすでにみたように、ルドヴィク・ヴァリンスキのようなすぐれた才幹をもった社会主義者に対しては、マルクスの権威といえども——たとえばマルクスがまだ存命中であってさえ——たいした影響力を持たず、ほんのわずかでもその見解を動揺させることはできなかった。しかし、小ブルジョア的で愛国主義的心情をいだいたインテリゲンツィア層——もともと

この階層から社会愛国主義の潮流は自分たちの戦士を補充しているのである——にとっては、この綱領の民族的側面にもかかわらず、いやまさに民族的側面のゆえに、マルクス、エンゲルス、ベーベル、リープクネヒトの個人的権威が、十分な良心の免罪符になっているのである。とりわけ、ヴァリンスキ学派のポーランド社会主義者による長年の断固たる聖戦の後では、おそらく民族主義者の方がより古いのであり、それにもかかわらず、いやまさにそれゆえに、より由緒正しき「社会主義者」であるという発見は、きわめて愉快なものであった。

したがって、今やポーランド問題に関する社会主義インターナショナルの古い伝統が、労働運動の実際的関心の領域に入り込んできたがゆえに、この伝統を批判的分析にさらすことが、ポーランド社会主義および国際社会主義にとって緊急の必要事となった。すなわち、社会愛国主義者たちが、ポーランド労働運動の社会主義的・階級的視点に対して最も強力な障害を作り出す場合の基盤となっているポーランドについての幻想や古くさくなくなった見解を一掃してしまうこと、および社会愛国主義の支持者たちが、ポーランド社会主義者の形式的な信仰箇条にかえてしまった伝統的見解を批判的に分析することが重要なのである。つまり、ポーランド問題に関するマルクスの古くさくなくなった見解を修正し、マルクス理論の諸原則をポーランド労働運動に適用してみる必要があるのである。

他方で、ポーランド社会党は、ここ数年の間、『ポーランド社会党報』という名のパンフレットを通じて、ドイツその他の国々の社会主義者の間においてポーランドの民族的伝統を復活し鼓舞するべく努力しているが、それは、非常に明確な実践的目的を持っていた。すなわち、ポーランド再興の綱領をただポーランド王国の社会主義者に対してだけでなく、同時にガリシアやプロイセン地域の社会主義者に対しても押しつけること、それによって全く異った政治的諸条件のもとで闘っているポーランド労働運動のこれら三つの部分を、民族主義の基盤の上で——というのは、ポーランド・プロレタリアートの最も本質的な政治的利害に逆って——一つの統一

体にまとめあげること、これである。この傾向がもたらす他の側面は、いうまでもなく、ポーランドの社会主義運動を階級総体を包括するドイツおよびオーストリアの社会民主主義運動から政治的に分離すること、すなわち、当時はまだ同じ戦列に所属していたドイツとオーストリアのプロレタリアートを民族的に分裂させることであつた。

このような方向での二年間にわたる社会愛国主義の努力の頂点は、当然のことながら、1896年8月の社会主義インターナショナル・ロンドン大会であつた。この大会にポーランド社会党は、ポーランド再興をめざすポーランド社会主義者の努力は国際労働運動の不可欠の要求として認められるべきだという決議を提出することになっていた。そして、それによって、ポーランド労働運動における民族主義的方向は、最高の社会主義機関の承認を受けたことになり、ポーランド社会主義者の戦列から起るかも知れないその後の批判はすべてうちくだかれるはずであつた。

このような状況のもとで、ロンドン大会へのポーランド社会党の提案が出発点となつて、ポーランド問題に関する広汎な討論がその後続くことになつた。これらの討論は——一部は純粹に理論的な性格のものであり、一部は戦術の領域や實際政治の領域にまで及んだが——まず『ノイエ・ツァイト』に始まり、つづいてドイツ社会民主党の中央機関誌『フォアヴェルツ』や他のドイツの党新聞（『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』、『ゼクジッシェ・アルバイターツァイトゥング』）にまで拡大され、さらに、イタリアの出版物にまで入りこんでいった。1896年とその後、数年にわたつて展開されたこれらすべての活発な討論を、読者は本書の中に見出すことができるであらう。我々は、社会愛国主義者たちとちがつて、社会主義陣営においては批判的思考を麻痺させることではなく、それを目覚めさせることをこそ社会民主党の指導的原理と考えているので、我々は読者に表明されたすべての見解——我々の立場に賛成するものも反対するものも含めて当時表明されたすべての見解——を何ら変更を加えることなく、いささかも出来合いの結論を押しつけることなく提供したいと思う。

我々は、読者がみずから独立してあの討論を評価することができ、ポーランド労働運動にとって根本的な重要性をもっているこの問題に対して独自の見解と判断を形成することができるだけの十分な素材を提供するつもりである。

政治的な観点からいえば、『ノイエ・ツァイト』の中で始められた討論の直接的目的は完全に達せられた。なぜなら、この論争は人々をいたく動かし、西ヨーロッパの社会主義者たちに社会愛国主義政党の政治的意味と帰結とを憂慮させることになり、その結果、ロンドン大会への社会愛国主義者たちの提案は無視され、その代りに、民族自決権の承認というようなすべての被抑圧民族に対する社会主義者の同情を一般的な形でもう一度確認する決議が満場一致で採択されたにすぎないからである。^(三)ところで、被抑圧民族に対する社会主義者の同情と共感の表明は、本来何ら疑問の余地のないところである。なぜなら、これはまさに社会主義的世界観から当然生じてくる結論だからである。同様に、社会主義者にとって、あらゆる民族の独立の権利は、明白で疑いのないところであったし、今でもそうである。なぜなら、この権利もまた社会主義の最も基本的な原則から直接に発生してくるものだからである。この決議を提案した社会愛国主義者にとっては、すべての民族をひっくるめての同情表明が問題だったのではなく、ポーランドの再興を労働運動の特殊な政治的要求として強調することが問題だったのであり、また、すべての民族の独立する権利の承認が問題だったのでなく、ポーランドにおいて、この「権利」の実現をめざすポーランド社会主義者の努力の正当性と必要性を認めさせることが問題だったのである。しかし、この点に関してロンドン大会はまさに正反対の指令をくだした。すなわち、ロンドン大会はただポーランド問題を他のあらゆる被抑圧民族の問題と同一視しただけでなく、同時に、あらゆる当該民族の労働者に対して、民族的抑圧に対する唯一の治療法として、それぞれ自国の内部で一時的に独立した資本主義国家の再興のために努力することではなくして、国際社会主義の戦列に参加して、社会主義体制をできるだけ早く

導入し、それによって階級抑圧とともにあらゆる抑圧を、したがって民族的抑圧をも根底から廃棄することを命じたのである。

我々のこの批判から直ちに明らかになることは、社会愛国主義の潮流が、国際社会主義運動の中でその存在を主張する場合の唯一の根拠であるポーランド問題に関する伝統的見解が、今ではすでにどれほど古くさくなってしまったか、どれほど労働運動の現実の利益に対立するものとなってしまうかということである。このことは、とりわけポーランド再興問題がプロレタリアートの現実政治の領域に移され、したがって必然的にたくさんの他の国際問題にも衝撃を与え、以前には、つまり『新ライン新聞』や1848年革命の時代には決して存在しなかったような光景がよびおこされたという事実をみれば明らかである。そこで、直ちに次のような問題が起るのである。もし国際プロレタリアートが、ポーランド国家の民族的再興を社会主義政策の課題と認めるならば、その時にはなぜ同様にエルザス・ロートリンゲン地域のドイツからの分離とフランスへの復帰を社会民主党の課題として認めてならないわけがあるだろうか。同様に、トリエストとトリエントの奪還のために努力しているイタリアの民族主義的傾向に対する支持の問題、ベーメン地域の分離主義的努力の問題、等々も思い浮かぶであろう。

他方で、分割国家内に現存する社会主義政党からポーランド人の社会主義組織を分離させようとする傾向、逆にいえば三つのポーランド地域のプロレタリアートを一つの労働者党に結集しようとする傾向を認めることから、一連の組織問題が発生してきた。ドイツにあっては、ドイツ人住民とならんで、ポーランド人だけでなく、かなりの数のデンマーク人、エルザスのフランス人、東プロイセンのリトアニア人などが住んでいる。社会愛国主義の潮流がポーランド・プロレタリアートのために採用した原則を帰結まで押し進めれば、統一されているドイツ社会民主党を民族的境界に従って分離されたいいくつかの政党へと分割すべきであるという結論に帰結するであろう。そして、この結論はさまざまの他の国家についても当然あて

はまることになる。なぜなら、大規模な近代国家が民族的に単一であるなどということはほとんどありえないからである。

かくして、社会愛国主義的方向を承認することは、国際社会民主主義の現在の立場に根本的修正をもたらすこととなり、純粋に階級的基盤の上に立脚する綱領、戦術、組織原則を民族的基盤の上に立脚するものへと後退させることになるのである。

それゆえ、ここでは社会愛国主義的傾向がもたらすこのような帰結と、この全問題が特殊ポーランドの問題から真に国際的な問題となり、ドイツ、イタリア、ロシアの同志をも直接に討論の中にまきこんだという事実とを指摘するだけで十分である。

特に後者に関して一言しよう。ロンドン大会におけるポーランド社会党の提案およびこの提案が採択されたならば承認されるはずであった全傾向は、ロシア本国の労働運動にとって巨大な政治的重要性を持っていた。

ポーランド社会党の出版物にある程度精通しているポーランドの読者たちは、社会愛国主義的傾向が、公的戦場への最初の登場であった1893年以来一貫して、ポーランド公衆の前で、自己の存在理由をもっぱらロシアにおける社会的停滞性およびロシア労働運動の絶望的状态によって根拠づけようと努力してきたという事実を知っている。^(四)西ヨーロッパにおける伝統的なポーランド政策を、もう一度復活させて育成することにより、社会愛国主義はまさにこのような伝統的なロシア観を国際社会主義の戦列の中でも保持しようと試みた。社会愛国主義は、ポーランド労働運動をツァーリ帝国内における唯一のまじめな革命的現象だと主張することによって、ドイツ、フランスその他の国々の社会主義者たちが、ロシアの社会関係について、1848年革命の時代に、ニコライ一世のロシア、農奴制のロシアに支配的であったのと同じ観念を今なお保持しているかのごとき欺瞞にふけているのである。したがって、80年代の終りに始まったロシアの労働運動は、国際社会主義者のサークルの中にきわめて敵対的な雰囲気を見出さざるをえなかった。かくして、1896年春にペテルブルクにおいて4万人の労

働者による巨大なストライキの勃発がロシア・プロレタリアートの大衆運動の開始を告げたまさにその時、国際社会主義は社会愛国主義者の提案にもとづいて、ツァーリズム崩壊の希望をロシア・プロレタリアートの政治的階級闘争の中ではなく、ポーランド人の民族闘争の中に求めると公式に宣言したのである。このことは、つまり国際社会主義はロシアの労働者からは何ものも期待せず、その革命闘争をも無視すると公然と宣言したのと同じことである。

かくして、ロンドン大会での社会愛国主義者の提案に対する批判と、それに関連してポーランド問題に関するすべての伝統的立場に対する批判とが、そのまま伝統的なロシア観に対する批判となったのである。そして、ニコライ一世の家父長的ロシアというすでに時代おくれになったロシア観の代りに、この批判は、西ヨーロッパの社会主義者たちをもう一度はっきりと近代的な資本主義国ロシア、闘争するプロレタリアートの国ロシアという観念と向き合せ、それによって、ロシアの労働運動が国際的な運動の中ですでに第一級の重要性を持った現実および要因として正式な市民権と意識的な承認を勝ち得ているということを確認したのである。

かくして、ポーランド社会主義の国内問題に関する討論は、始めから西ヨーロッパの社会主義の中で支配的であった見解を三つの点で、つまり、国際的諸関係、ロシア国内の諸関係、ポーランド国内の諸関係という三つの点で根本的に修正することを必要ならしめたのである。

人はしばしばマルクス理論の「ドグマティズム」について語る。ポーランド問題に関するこのような見解の修正は、そのような非難がどれほど表面的なものにすぎないかを示す一つの適切な事例である。たしかに、ポーランドの社会愛国主義者は、ある時点でのみ通用するマルクスの時局論を、歴史的諸条件の発展にかかわりなくあらゆる時代に変ることなく通用し、しかも「マルクス自身」がかってそう述べたがゆえに疑問も批判も許さぬというような真のドグマに変えてしまおうと努力した。その全精神においてマルクス主義の見解や学説を侮辱するものである傾向を承認させよ

うとして、マルクスの名前をこのように濫用することは、民族主義的なポーランドのインテリゲンツィアの精神的野蛮化が生みだす一時的な欺瞞としてのみ理解されうる。

なぜなら、「マルクス主義」の本質は、現実問題に関するあれこれの見解にあるのではなく、二つの基本的な原理、つまり、歴史研究の弁証法的—唯物論的方法——この主たる成果が階級闘争の理論である——と、資本主義経済の発展に関する原理的分析にこそあるからである。この後者の理論——価値、剰余価値、貨幣、資本の集中、恐慌などの本質と起源とに関する説明——は、もともと弁証法と史的唯物論をブルジョア経済の時代へ天才的に適用したにすぎないものである。したがって、全マルクス教義の精髓をなしているものは、社会生活の問題を探究する場合に用いるべき弁証法的—唯物論的方法ということになる。この方法からみれば、確定した・不変の・固定した現象・原則・ドグマといったものは存在せず、人間社会の事物に関しては、*「条理が不条理と変わり、善事が苦悩の種となる」*というメフィストフェレスの観察が格言となる。また、この方法からみれば、いかなる歴史的「真理」といえども、現実の歴史的発展によるたえざる仮借なき批判をまぬがれえないのである。

それゆえ、ポーランド社会民主党は、始めからポーランドに関するマルクスの古ぼけた見解の中に以前の民族主義的スローガンの承認を求めるなどということをして自己の任務とは考えず、マルクス主義理論の方法と基本原則をポーランドの社会的諸関係に適用することをこそ、みずからの任務と考えたのである。ポーランド社会主義の理論的宝庫の中で、この点だけが空白状態であることを彼らは見出したのである。ポーランド労働運動の創始者であり、科学的社会主義の世界観をはじめてわが国に導入した人々であるヴァリンスキとその同志たちは、貴族的・民族的イデオロギーの残滓および当時支配的な社会イデオロギーであった有機的労働の理論に直面せざるをえなかった。新しい階級であるプロレタリアートの利益代表者として、彼らはとりわけ支配階級のイデオロギー的遺産から脱却しなければ

ならなかった。そこで、彼らはためらうことなく、これまでのポーランドの民族運動とその理論とを貴族身分の利己的な階級利害の表現とみなし、「有機的労働」の理論をわが国の工業ブルジョア階級の、同様に物質的な狭い階級利害の表現とみなすことによって、この課題を果したのである。かくして、ポーランドの社会主義者たちは、70年代の終りと80年代の始めに、貴族的民族主義の理論も、ブルジョア的「有機的労働」の理論もともに、あらゆる社会層の利害調和をめざす理論であるとして排撃することにより、わが国においてはじめて階級対立の理論に道をひらいたのである。まさにこのことによって、資本主義社会についての一般的なマルクス主義的分析が、その結論——プロレタリアートの階級闘争と社会主義綱領——とともにポーランドにもたらされたることになったのである。このことがまた、ルドヴィク・ヴァリンスキ、デックシュタインその他の同志たちの歴史的功績である。

しかし、彼らはそれと同時に、ポーランド・プロレタリアートの直接的課題としての社会主義革命をポーランドの支配階級の政治綱領に対置することによって、労働運動一般を政治綱領なしに放置し、社会主義を陰謀的・ユートピア的基盤の上においたのである。いいかえれば、彼らは社会主義運動をセクトの狭い限界内で植物のように生長し、短時間のうちに消え失せてしまうものと判断したのである。^(五)このような見解は、民族主義が社会主義的努力と公然と敵対し、T. T. イェシーミウコフスキ^⑩の精神において利害調和と民族的統一という使い古された看板をかかげて登場した時にも、あるいはまたリマノフスキ氏の「民族的社会主義」の試みにおけるように原始的で、無能で、素朴なものではあるが、民族主義が社会主義と結びつこうと試みた時でも、ともかく民族主義に対する楯として十分に役立ちえた。ところが民族主義が民族的統一という信用のなくなった理論を放棄し、逆に階級闘争の理論の背後に身をひそめ、プロレタリアートの政治綱領を看板にかかげて登場した時には、つまり民族主義の近代版に直面した時には、この見解は見事に失敗しなければならなかったのである。

それゆえ、ポーランドにおける労働運動の大衆的規模への嵐のような成長——90年代初頭の——と社会主義の陰謀主義的方向の挫折のあとで、社会民主党はプロレタリアートの階級闘争のための政治綱領を作り出し根拠づける必要に迫られた。そしてこのことはただ——マルクス主義の理論に従って——ポーランド社会の現実の発展方向の分析、つまり政治的・精神的・道徳的性格の諸現象を理解する鍵を生産関係とそこから発生する階級関係の中に探ろうとする研究によってのみ可能となるのであった。今度はもはやポーランドにおける資本主義的発展の確認——わが国に資本の集中、プロレタリア化、搾取、一言にしていえば、社会的無政府状態と階級闘争がどの程度まで生み出されているか——が問題なのではなく、この発展の分析——この発展がどの程度まで社会の中に一定の政治的傾向を生みだしているか——が問題なのである。すなわち、もはやあらゆる国の資本主義に共通の典型的な現象がポーランド社会にも現われていることを確認することが問題なのではなく、資本主義がわが国の特殊な歴史的・政治的諸条件の結果として生みだしたところのポーランドの社会生活に特有な現象を説明することが問題なのである。一言でいえば、もはやブルジョア社会に関するマルクス主義的分析のすでに仕上がった普遍的な結論をそのままポーランド社会に当てはめてみる必要があるのではなく、ブルジョア・ポーランドについての独自の社会分析を企て、それによって社会主義を抽象的な雲のごとき世界や実体なき図式から取出してポーランドの現実の基盤の上に置く必要があるのであった。この分析——その経済的側面については、我々は『ポーランドの産業的発展』（ライプチヒ、1898、ドゥンカー・ウント・フンブロット出版社）の中で概観しようとした——の概略は、あらゆる重要な結論とともに、1893年の社会主義インターナショナル・チューリヒ大会での社会民主党の公式報告の中に提出されている。この分析は、論理的に結びついた二つの結論——一方は肯定的な、他方は否定的な——を生みだした。一方では、それは労働が大衆的発展を通じて経験的にかちえた結論、すなわちポーランド王国のポーランド・プロレタリ

アートの差し迫った政治的課題は絶対主義の転覆と政治生活における民主主義の確立をめざすロシア・プロレタリアートとの共同闘争であるという結論の理論的確認であった。他方では、ポーランド再興のための努力はポーランドの資本主義的発展という現実を前にして今や希望なきユートピアと化し、逆にこの資本主義的発展から、上に特色づけたような政治綱領が鉄のごとき歴史的必然性の帰結として生み出されているという結論の理論的確認であった。

このようにして、ポーランド社会民主党は、科学的社会主義の原理をポーランドの諸関係に適用するに際して、現代ポーランドの社会的発展に関して、いわば独自の説明を見出さねばならなかった。ちょうど、ロシア社会民主党が、ロシア本国の特殊な社会的諸関係の分析によって、ロシア・プロレタリアートの積極的な政治綱領を根拠づけ、「ナロードニキ」の理論を批判的に清算することによって、ロシア・プロレタリアートに進むべき道を指し示さなければならなかったように。かくして、ポーランドとロシアの社会民主党は完全に異った道を通してではあるが、彼らの理論の積極的な結論、つまり共通の政治綱領という結論に到達したのである。しかし、たった一つだけちがいがあがある。それは、フリードリヒ・エンゲルスが、すでに1875年に『フォルクスシュタート』に載せたトカチーフへの返答の中で、ロシア「ナロードニキ」の主要な欠陥に対して天才的な洞察を示し、ロシアにおける資本主義の発展という基本的方向を原始的な村落共同体の崩壊によって指し示したのに対して、ポーランドに関してはエンゲルスもマルクスも最後まで1848年の古い立場を検討しなおそうという努力を払わず、むしろ晩年にはこの立場を全く機械的にポーランド社会主義運動に適用したという点である。我々はこのことを、1880年11月のジュネーブでの記念集会によせた彼らの手紙の中に見ることができるし、また1892年の共産党宣言ポーランド語版へのエンゲルスの序文の中にもみることができる^⑩。

すでに、1893年に社会民主党がはじめて上述の社会理論にもとづいて社

会愛国主義を批判した時、社会愛国主義は自己を擁護し、根拠づけるのに子供だましのような論拠しか持ち合わせていないことを暴露した。このような精神的貧困は、当然のことながら、控え目なポーランド公衆の前だけでなしに、国際的な戦場に登場しなければならなくなった時、より一層目立つものとなった。民族主義の黨員たちは、ここにおいて完全な無能力を示し、マルクス主義理論にもとづいてなされた分析を反駁する振りさえできなかつたのみか、それを理解することさえできなかつたのである。たとえば、わが国は支配階級の物質的利害によって、ますます強くロシアと結びつけられているというポーランドの資本主義的發展の方向が提示されると、社会愛国主義者たちは、純粹に経済的な基盤からはじまって、政治的利害と政治的重心、さらには最も微妙な社会イデオロギーの領域にいたるまでも貫徹している全く客観的な極度に錯綜したこの歴史過程に対して、それは「有機的併合」を求める社会民主党の主観的努力にすぎないとか、あるいは再興されたポーランドの中で一体どこに自分たちの「ペルカル」（上等な綿布の一種）を売ることができるだろうかという、ポーランドの工場主たちの主観的心配にすぎないとかいう「烙印を押そう」と努めているのである。社会民族主義の信奉者たちの返答もまた同様な水準にある。つまり、彼らのところにあっても、社会主義者が資本主義的發展一般というような軽蔑すべき事柄に考慮を払わなければならないということに対する憤激、あるいは、たとえば1894年10月の『プシェドシフィット』にみられるように、ロシア市場の喪失によってポーランド産業が崩壊し、労働者が勤め先を失なった場合に、労働者たちにいかにして仕事をみつけてやることができるかを配慮することが、再興されたポーランド議会における社会主義代議士たちの仕事であるという気前のよい約束などがみられるだけである。^(六)

ブルジョア・ポーランドの社会的諸関係の総体を「販売市場」の問題に還元し、客観的な歴史過程の動向を社会主義者の主観的願望、恐怖、心配などに還元してしまう無思想で平板なやり方は、社会愛国主義者の頭の中

では、史的唯物論の理論もマルクスの全理論もともにブルジョア批評家の頭の中におけると同じように戯画化されて映っているのだということを示すものである。ブルジョア批評家たちは、マルクスの教義を何らかのいまわしい妖怪へと歪曲し墮落させることによって、定期的にマルクス理論を「否定している」のである。ポーランドの出版物やドイツの出版物におけるこの種の議論がポーランドにおいて社会主義的と自称している人々によってのみ表明されているということ、この事実そのものがポーランドの社会主義インテリゲンツィアのおどろくべき精神的水準の証明である。ここに、我々の「急進的な」インテリゲンツィアが長年にわたって受けてきた教育の成果が表われている。この教育とは、『18世紀および19世紀の社会理論』^⑧という名を冠したりマノフスキ編集の平板にして無思想な書物——ドイツ人のいう「ベッテルズuppe」（中身のうすいスープ）という表現がぴったりの——にもとづく教育であり、したがって、特に80年代の半ば以降、第一「プロレタリアート」党の国外出版物である『ヴェルカ・クラス』と『プシェドシフィト』がその影響を憂慮しなければならなかったところの月並にして声高な「革命的」書物にもとづく教育であった。ここにもまたポーランドのインテリゲンツィアは、最善の場合でも科学的社会主義の精神で思考するようにではなく、社会主義的信念を信仰するように教育されたという悲しむべき事実が顔を出している。

ドイツでもフランスでも、マルクス主義者とそのブルジョア的な反対者との間の討論をみると、論争者は互いに「異邦人」であり、彼らの間を分つものは個々の問題にかんする見解の相違ではなくして全思考方法、全世界観の相違であるということが直ちに分るのであるが、全く同じように社会愛国主義者との論争もバベルの塔にむかって議論しているようなものである。社会愛国主義者の返答の中にもまた、初めからマルクス主義に対するブルジョア的敵対者の返答の中に通常鳴り響いているのと同じ独特の調子をもった憤激と悲嘆の声が聞かれるのである。

つまり、ポーランドの社会愛国主義者たちが、すべての小ブルジョア空

想主義者たちと共通しているのは、彼らの空想にとって好ましくない歴史的事実の暴露を、この暴露をなした人物の人格的卑劣さの結果とみなしているという点である。この世の何物についても、彼らは次のことを理解することができないのだ。すなわち、そのような場合に問題となるのはせいぜい客観的な歴史過程の「卑劣さ」なのであり、この歴史過程の傾向に言及した人物の卑劣さではないということ、および人間がこの過程にいくら目をつぶろうとも、この卑劣な過程は決して作用することをやめないであろうということ、これである。同様に彼らは次のことをも理解することができないのだ。つまり、歴史過程の弁証法は歴史的要求の伝統的な充足形態の基盤を掘りくずし、やがてそれを排除してしまう時には、同時に他の新しい充足形態を作り出すという長所を持っているがゆえに、歴史一般の「卑劣さ」について語ることはできないということ。社会的発展一般が、その維持のための物質的保証を与えていないような「諸利害」は、もっと詳細に検討してみると、通常根底において古くさくなくなった、破産した、あるいは一般に非現実的なものとなった「諸利害」にすぎないのである。

ドイツおよびフランスの民主主義者たちが、1848年にポーランド問題に対する自分たちの立場を表明した時、彼らは一方では当時存在したポーランド・シュラヒタの民族運動に期待をかけ、他方ではもっぱら彼ら自身の民主主義政策の利害によって動かされていた。彼らはポーランドの社会主義運動とは、いかなる関係も持っていなかったし、また実際持つこともできなかつた。なぜなら、そのような運動は当時はまだ存在していなかつたからである。しかし、今日では、ポーランド社会主義者としての我々にとっては、何らかの社会現象に対する態度決定に際して、この態度決定がポーランド・プロレタリアートの階級的利害にどのような影響を与えるかという問題がとりわけ重要である。ポーランドの客観的な社会発展の分析からは、ポーランド再興の努力は今日では小ブルジョア的なユートピアにすぎず、それ自身プロレタリアートの階級闘争を混乱させ、脇道にそらせる

ことができるだけであるという結論がひき出される。それゆえ、ポーランドの社会民主党は、今日ではポーランド社会主義運動の利害を考慮して、民族主義的立場を放棄し、当時の西ヨーロッパの民主主義者とまさに正反対の態度をとっているのである。ところが、ポーランド再興をユートピアとし、これをポーランドにおける社会主義の利害に対立せしめた歴史発展のまさにこの転換が、国際民主主義の諸利益を充足させる方向で新しい解決をもたらしているのである。独立ポーランドを、反動的なロシア・ツァーリズムから西ヨーロッパを守るための緩衝地帯または防壁たらしめようとする思想が実現しがたいものであることが証明されたまさにその時、この思想を葬った資本主義的發展が、その代りに、ロシアとポーランドのプロレタリアートの連帯した革命的階級運動、単に機械的にヨーロッパを絶対主義から守るだけでなく、絶対主義そのものの基礎をほりくずし、粉碎することのできる同盟者、西ヨーロッパにとってきわめて役に立つ新しい同盟者をプロレタリアートという形で作り出したのである。

この解決はまたポーランド・プロレタリアートの民族的利益とも矛盾しない。この点におけるポーランド・プロレタリアートの真の利益、つまり、自由、民族文化發展の自由、市民的平等、あらゆる民族的抑圧の除去といったことは、分割国家の最も広汎な民主化——この民主化の中には国内自治の要求も当然の要素として含まれている——を求めるプロレタリアートの普遍的な階級的な努力の中に唯一可能な表現を見出しているのである。これに対して、さらに進んで労働者を抑圧する武器である独立した階級国家の装置を手に入れようとする要求は、現存の諸条件のもとで、この努力のユートピア性に直面した労働者の観念上の利益や小ブルジョア的世界観が生みだしたものであるが、プロレタリアートの真の利益とも科学的社会主義の思考方法一般とも全く無縁なものである。

この批判に抵抗するだけの論拠が社会愛国主義には全く欠けているということは、次のような注目すべき事実の中にはっきりとあらわれている。すなわち、社会愛国主義の擁護のために外国の出版物の中でなされている

討論に一人の外国の理論家——カウツキー^④——が登場し、ポーランド再興の綱領の元来の支持者の中にはこの綱領を根拠づけるいかなる根拠も見出しえないがゆえに、この綱領を支持するための全理論をカウツキーみずから展開する必要があると痛感したという事実である。さらに、読者はこの有名なマルクス主義の代表者が、当然のことながら、ポーランドの社会生活についての知識なしに、純粹に抽象的な推論によってポーランドのさまざまな社会階級の利害を演繹し、このようにして——抽象的な推論による場合にしばしば見られることであるが——ポーランドの再興は、単にポーランド・プロレタリアートの、あるいは一般になんらかの特殊な一階級の緊急の必要事というにとどまらず、ブルジョアジー、シュラヒタ、農民、小ブルジョア層、インテリゲンツィア、プロレタリアートといった例外なくすべての社会階級の緊急の必要事なのであるという予期しない結論に到達した時、どれほどの困難と取り組まなければならなかったかを見るであろう。それと同時に、社会愛国主義のいわゆる純粹な「労働者綱領」は、このあまりに好都合な結論によって、実現のための真の基盤や見込みを得たにもかかわらず、この変形のためにあらゆる階級的な性格を失ってしまった。そして、それはあらゆる社会層の利害調和の表現であった段階、今は亡きズィグムント・フォルトナート・ミウコフスキの主張する「民族的統一」の段階へとひそかに後退してしまったのである。

カウツキーの論文に対する直接的な反論が存在しないのは、とりわけこの論文がロンドン大会の始まりとほぼ時を同じくしてあらわれ、大会前に反論を公表することがすでに不可能であったという事情によるのである。ところが、ロンドン大会ののちには、ポーランド再興というテーマに関する討論は、現実性と実際的重要性とを失ってしまった。なぜなら、すでに述べたように、社会愛国主義者の提案——この提案の根拠づけをこそカウツキーの論文は目ざしていたのだ——はロンドン大会で採択されなかったからである。

カウツキーの推論全体についていえば、彼はその唯一の根拠——ブルジ

ヨアジーと土地貴族の経済的利害の理論——を彼自身述べているように『ノイエ・ツァイト』の中のS・G氏の論文^⑮からそのままひきうつしているのである。この控え目なイニシアルのかけにかくれて、『プシェドシフィト』の一記者である著者は、ここでポーランド再興の綱領の「物質的な」根拠づけを試みている。すなわち、彼は一連の統計上の偽造、歴史的史料の捏造、たまたま手もとにあつて利用することのできたさまざまな著者からの引用、等々の助けをかりて、ツァーリズムに抑圧されているポーランド資本主義がポーランド・ブルジョアジーの中に民族主義的・分離主義的努力を生みだすにちがいないということを示そうと試みた。何よりもヨーロッパの精神風土に育った文筆家であったカウツキーは、当然のことながら、このような雑草——すでにラッサールが彼の時代にユリアン・シュミットに対する酷評^⑯によってドイツの土壌からは完全に抜き去ってしまった雑草——は「乞食のところでこそしらみは繁殖する」と諺にもいうように、わが国の「民族主義的」ジャーナリズムの貧しい土壌の上でのみ繁茂したにすぎないということを見抜くことができなかったのである。それゆえ、カウツキーは大まじめに、この「民族主義的な」統計学者の偽造の犠牲となった。したがって、ドイツの欺かれた理論家よりもポーランドの偽造者の方が我々の批判の矢面に立たされることになったのは当然であった。主としてS・G氏によってなされた統計的偽造に関する決して完全なものではないが、真に本質的な洞察は『ポーランドの産業的発展』の中にみられる。しかし、これに対して『プシェドシフィト』の中で、民族主義的な戦争計画とか、大砲の密輸とかに没頭しているS・G氏は、今日にいたるまで一言も答えてはいないのである。最後に、カウツキーの論文の純粋に政治的および戦術的詳細についていえば、読者は後に本書に収録されているこの著者の論文を読むに際して、カウツキー自身、ポーランド問題に対する自己の見解を個々の点で社会民主主義的立場に近づけている——この立場の正しさをほとんど毎日立証している事実の圧力のもとで——ということに気づくであろう。

ポーランド民族問題に関する伝統的見解のこのような修正は1896年に始まったが、これはこの年のうちには終らず、最近まで尾を引いていた。まさに同じ1896年にドイツではポーランド人の社会主義運動がドイツ社会主義運動から分離するという過程が始まったが、これは、一連の口ではいえない程の苦痛に満ちた事件ののちにプロイセン地域のポーランド社会党が完全にドイツ社会民主党から離脱するという結末をもって終った。我々が、1896年の春に『ノイエ・ツァイト』誌の最初の論文で、民族主義的傾向の論理的帰結として前もって詳述したことの多くが、その後の数年間に非常な正確さで立証されてきた。社会愛国主義的傾向が必然的にポーランド社会主義と国際社会主義の間にひきおこすにちがいない——と我々が始めから指摘していた——政治的対立も、ドイツにおけるポーランド人労働運動の歴史の中で明白な事実となった。この経験はドイツ社会民主党の見解に影響を与えずにはおかなかった。そしてこの影響はポーランド再興の綱領とポーランド・プロレタリアートの階級闘争とを結びつけることは不可能である、というアウグスト・ベーベルおよび党幹部会の有名な宣言の中に公式な表現を見出したのであった。

ロシアにおいても事態は同様な過程をたどった。社会愛国主義的方向とロシア労働運動との対立もまた、ロシア内部に社会民主主義運動が芽生え、それが一つの統一された政党へと成長するに及んで、次第に明確な姿をとるようになった。その結果、ロシアの社会民主主義者たちが、ポーランド社会党の方向を前にして、みずから企てなければならなかった修正が、『イスクラ』の二、三の論文の中に定式化されている。それらを読者は本書の中にもみることができよう。^⑩

最後に、純粹に理論的な側面から、フランツ・メーリンクがポーランド問題に関するマルクスの見解の批判を行なっている。彼はマルクス、エンゲルス、ラッサールの遺稿集の編集に際して、その後の諸関係の変化という観点から彼らの見解の再検討を行なっているのである。^⑪そして、ここでは、マルクス主義的原則や方法の適用による『新ライン新聞』の立場の

修正が、ポーランド社会民主党の見解の完全な承認という結果に導いているのである。それゆえ、人は今日言うことができる。ポーランド問題に関しては、国際社会主義の戦列においてすでに完全に決定的で意識的な転換が起った、^(七)と。

ポーランド社会民主党が1893年に登場した時から主張し、1896年には国際社会主義運動の中でも擁護しはじめた理論に対して最も力強い証明を与えたものは、最近数年間および数ヶ月間にみられた事実である。我々が本書を印刷にまわしたまさにその瞬間に、わが国はロシアとともに激しい社会的危機を経験した。本書の冒頭に収められている論文がはじめて世に出た1896年以来現在にいたるまで、この二つの国は発展の全過程を体験し、今日では、ヘーゲルのいう革命的な「量から質への転換」——ひそかに蓄積されてきた量的な変化の新しい質への転換——が、すべての人の目に見える形で進行している。我々は資本主義的発展による絶対主義の掘りくずしというこの内的な過程の終末の立会人である。そして社会民主党は、その綱領的立場をまさにこの資本主義的発展の上においているのである。その際、我々が初めから注意をよびかけてきたこの資本主義過程の二つの側面が、はっきりした政治的表現を生み出している。ポーランドとロシアが一つの経済機構に融合してしまったという事実——これがわが国における分離主義的・民族的努力の物質的基盤を奪い去ってしまった——は、ポーランド再興を求める積極的な政治的努力としてのポーランド民族運動が実際にほとんどあとかたもなく消滅してしまったという顕著な現象の中に表われている。生命がけの行動をよびかけ、ロシアにおけるすべての革命的で反政府的な分子を社会の表面に呼び出し、まだやっと芽生えたばかりのロシア自由主義というようなささいな現象を、公然たる革命的沸騰にまで成長せしめた戦時、そのうえ、まだ社会の片すみに小さな火花としてくすぶっていた独立のための努力にとっては、最後のアピールの機会であり、最後の歴史的な存在証明の機会であった戦時、その戦時においてさえ、ブルジョア・ポーランドは、おどろく世界を尻目に墓地のように静ま

りかえていたのである。反対に、事態の革命的な展開という圧力のもとで起った民族主義の発展における唯一の現象は、民族主義者の一翼における民族独立綱領の放棄であった。それは、1903年の公然たる綱領上の宣言にもとづく民族民主主義者たちの正式の放棄と、ツァーリ帝国に革命が勃発して後、その合言葉——ポーランドのロシアからの分離をめざす武装蜂起——を完全に断念したポーランド社会党によるこの綱領の事実上の棚上げとである。「ワルシャワ立法議会」という要求をかけた今年一月末のこの党の「政治宣言」は、ロシアにおける革命的危機という圧力のもとでの社会愛国主義の完全な破産を示すものである。もちろん、この新しい綱領も、完全に反動的で民族主義的な核心を保持している。そのことは、「ワルシャワ立法議会」という合言葉が全ロシア帝国のための民主主義的自由という綱領と何ら結びついていないという事実の中に示されている。これに対して、社会民主党は全ロシアを一つの共和国にし、ポーランドのためには民主主義的自由の有機的部分として国内自治を認めるという要求をかけたのである。全ツァーリ帝国の自由について沈黙し、それを無視するところに今なおユートピア性をまぬがれない今日の社会愛国主義綱領の民族主義的傾向があらわれている。しかし、この傾向は、ロシアの一層進んだ民主主義制度によって根拠づけられていない、いわば空中楼阁にすぎない「ワルシャワ立法議会」という要求が、今日の諸条件のもとでは、ポーランド再興の要求よりもさらに一層ユートピア的であるがゆえに、一層ばかげたものとなっている。つまり、「ワルシャワ立法議会」という要求は、ウィーン会議のお情けによる絶対主義ロシア国内でのポーランド王国の自主憲法という、すでに使い古され、歴史的発展にとりのこされた要求へより反動的に復帰するものにすぎない。

社会愛国主義がポーランドをロシアから分離させるための武装蜂起というスローガンから手を引き、ロシアの自由と何ら結びつかない自治ポーランドの憲法というスローガンにむきをかえた時、まさに社会愛国主義はみずから、社会的諸事件の経過が彼らの手から政治綱領を完全にたたき落し

てしまったのだという公然たる告白をしたのである。民族主義に関しては、今日ではただその否定的側面——ロシアにおける革命的な自由闘争の無視——のみが残っており、その肯定的側面——ポーランドの国家的独立のための努力——は空虚な言葉にすぎないことが証明されてしまった。というのは、ツァーリ帝国内でまさに暴力的な革命が進行中である現在、ロシアからのポーランドの分離や武装蜂起のスローガンを唱えない者が、今後もしやることがないだろうことは一層明らかだからである。いいかえれば、革命の勃発によって民族主義に関しては、ただ反動的側面のみが残っているだけであり、民族独立のための武装闘争というスローガンが担っていた外面的・形式的な「革命的」側面は、現在の革命の最初の巨浪の中で、とりかえしのつかないほど消滅してしまった。

この資本主義過程のもう一つの側面は、絶対主義に対するポーランドとロシアのプロレタリアートの連帯した革命的な階級行動の中にあらわされており、1897年に『ポーランドの産業的発展』の著者が結論として述べた言葉の正しさを文字通り証明するものである。「ロシア政府がポーランドを経済的に帝国に組み入れ、資本主義を民族的反抗に対する『解毒剤』として開発するにつれて、ロシア政府はまさにそのことによってポーランドに新たな社会階級たる産業プロレタリアートを育成する。そしてこの階級はそのおかれた地位全体からして、絶対主義体制の重大な敵手となるであろう。そしてプロレタリアートの反抗は民族的性格をもつことはできないにしても、ばあいによってはそれだけに一層強力となりうるであろう。というのは、それはまさしく政府のあれ程望んだポーランドとロシアのブルジョアジーの連帯に対して、理の当然としてポーランドとロシアのプロレタリアートの政治的連帯でもってこたえるだろうからである^⑩。「ポーランドとロシアの資本主義的融合は、最終産物として——そしてこれはロシア政府もポーランドのブルジョワジーもポーランドのナショナリストも同じ程度に見落しているのだが——まずさいしょにロシアのツァーリ支配の、ついでポーランド・ロシアの資本支配の、きたるべき破産にさいする法律

顧問としての、ポーランドとロシアのプロレタリアートの連帯を生み出すのである^②。最初の破産はすでに始まっている。マルクスの精神はワルシャワとペテルスブルクの街頭におけるプロレタリアートの革命の中で凱歌をあげている……。

社会的発展の全過程——その頂点がツァーリ帝国における今日の革命的爆発である——は、同時にわが国の民族主義にとって致命的なものとなった。しかし、ポーランドの民族性の問題に関してはそうではない。むしろその反対である。過去だけを凝視している反動的空想主義が廃墟、敗北、破壊しかみることのできないところに、革命的史的弁証法を理解することのできる研究者の目は、まさしくポーランド民族文化解放のための新しい展望を見出すのである。

社会民主党の「教条主義」に劣らずしばしば問題にされるのは、その「原則主義」である。さまざまな社会現象の広汎にして無限に多様な世界を「物質的利害」以外の何ものも知らず、たとえば民族感情のような高度の精神現象にはつんばでめくらであるような硬直した図式の中にむりやり押し込めようとする精神的偏狭さが批判されるのである。

そのような批判者に対しては、マルクス主義理論はゲーテの次の言葉で答えておけば十分であろう。「おまえさんは、おまえさんが理解した精神そのものなのであって、私自身ではないのだ」。

社会民主主義の「原則主義」を非難している人々がまさに、社会民主主義の世界観を偏狭で、重苦しく、精神を拘束する教義にかえてしまったのだ。マルクス主義は、その本質からいって、最も普遍的で最も実り豊かな思想、精神をふるいたたせる理論であり、世界と同じように広く、自然と同じようにしなやかで色調豊かであり、青年のように行動的で生命にあふれている。この理論のみが、過去の歴史の謎を解き明かし、今後の歴史的発展を予測させ、かくして「左の翼で過去にふれ、右の翼で未来にふれながら」現在において真に革命的で有効な行為へと飛翔することを可能ならしめるのである。

歴史的発展の真の傾向を認識したからといって、我々は自国の社会史への積極的な参与から解放されるわけでもなければ、インドの修業僧たちのように宿命論的に腕組みをして未来がもたらしてくれるものをただ坐して待っているということを許されるわけでもない。「人類はみずからの歴史を作る。しかし決して勝手気ままに作るのではない^⑧」とマルクスは言った。しかし、この命題は逆に言いかえても全く正しい。人類は勝手気ままに歴史を作るのではないが、しかしみずからの歴史を作る、と。我々が客観的な歴史過程の傾向を計算に入れたところで、それによって積極的な革命的エネルギーが弱められるわけでもなければ、麻痺されるわけでもなく、むしろ反対に意志と活動力が一層喚起され強化されるのである。というのは、それによって、我々は社会的発展の車輪をいかにして効果的に前進させることができるかを知ることができるし、何の効果もなしに壁に頭を打ちつけ、おそかれ早かれ幻滅と絶望と静観主義におちこむのを防ぐこともでき、さらに、歴史的発展がとうの昔に反革命的なものにかえてしまったような努力を革命的なものと思ひこむことからまぬがれることができるからである。

読者がこの本の中にわずかしこ含まれていない証明をどのように見るにせよ、最近半世紀間のわが社会の注目すべき謎に満ちた歴史を、その精神的相貌、そのイデオロギーの最も繊細なニュアンスにいたるまで明らかにすることができるのはマルクス主義だけである。実際、前代未聞のやり方で抑圧されている社会——最も基本的な民族的権利までが体系的に蹂躪され、精神的・文化的な生活が残忍に妨害されている——が、50年間というものの武装独立闘争だけでなく、ヨーロッパ的な生活形態を求めるむしろ弱々しい努力さえも、あるいは野蛮な専制君主に対する積極的反対さえも放棄してしまったという事実は、実際思想なきほら吹き以外の人々にとっては謎である。ギムナジウムの生徒の小さなサークルの中で、革命や「蜂起」を「作り出している」人々のみが、そのような歴史的問題を、ある階級や社会層に「調停者」というレッテルをはりつけ、この調停の「少数の」代

表者について語ることによって片づけ、解決することができると考えているのである。というのは、彼らは、我々の社会の現実の物質的發展条件からみて、全ポーランドのブルジョアジーとその今日の運命を代表する者こそまさにこれら「少数の」調停者なのであって、「大砲」や小ブルジョア空想主義者の蜂起について語っている他の少数の人々ではない、ということを理解していないからである。ブルジョア・ポーランド社会の、この恥ずべき過去と現在を最も深いところで突き動かしている推進力を正確に理解することこそがはじめてマルクス主義に依拠する研究者に、我国の歴史および階級闘争が進んでゆく今後の方向や筋道を洞察するための鍵を与えるのである。蜂起した貴族ポーランドの没落の原因、およびブルジョア資本主義ポーランドの恥ずべき歴史の原因に対するいかなるロマン的な空想主義によっても曇らされず、曖昧にされることのない洞察のみが、今日我々の目の前で進行している労働者ポーランドの革命的再生を予見することを可能ならしめたのである。また同時に、民族的・階級的発展の方向を洞察するところから現在において真に革命的な唯一の行為とは一体どのようなものであるかを知ることができるであろう。真に革命的な行為とは、自然発生的な歴史過程の中に意識を持ち込み、それによってこの過程を短縮し、促進する行為のことである。

わが国にあっては、プロレタリアートの階級闘争と民族問題との間には疑いもなく特別な歴史的関連が存在する。しかし、それはプロレタリアートの近代的運動を贖罪の山羊とみなし、この山羊に対して、久しい以前に歴史によって抹殺されてしまった貴族的・小ブルジョア的な支払の残額や破産した階級のすべての負債を支払ってくれるよう命令することができると考えている社会民族主義者が望むような意味においてではない。この関連は全く違った意味を持っており、ポーランド・プロレタリアートの階級闘争の枠組と精神の中においては、民族問題そのものがシュラヒタや小ブルジョア層の努力の中におけるのとは全く異った相貌を持っているのである。

わが国の民族問題は、労働者階級にとって疎遠なものではないし、またそうではありえない。労働者階級は、このようなきわめて耐えがたい野蛮な抑圧に無関心ではいられない。なぜなら、この抑圧は社会の精神的文化に対して向けられているからである。人類の名誉のために言えば、あらゆる時代を通じて、物質的利害の最も非人間的な抑圧といえども精神生活の領域における抑圧ほど、あるいは宗教的・民族的抑圧ほどの熱狂的で激烈な暴動や憎悪をよび起すことは出来ないのである。しかし、精神的財産の擁護のために英雄的蜂起や殉教を引き受けることができるのは、ただその物質的な社会状態からいって革命的な階級だけである。

民族的抑圧に甘んじ、犬のような従順さでそれに耐えること、わが国でこれができるのは、かつてはシュラヒタであり、今日ではブルジョア階級である。つまり、その物質的利害からいって純粹に反動的な所有階級であり、あの粗雑な「胃袋唯物論」——フォイエルバッハやマルクスの唯物論哲学もわが国の無味乾燥なジャーナリストの手にかかると皆こうなってしまう——をそのまま体現している階級である。今日の社会の中にいかなる「現世の富」も所有せず、歴史的発展によって現存体制のすべてを転覆する使命を与えられている階級としての——つまり革命的階級としてのわがプロレタリアートは、民族的抑圧を火傷として、恥辱として感じなければならぬ。そして実際、この民族的抑圧という不正は、今日の社会の資本主義的賃金労働者の運命につきものの全社会的窮乏、政治的不利益、精神的文化からの排除といった不正の大海の中でのほんの一滴の不正にすぎないという事実にもかかわらず、そう感じているのである。

前述のように、ここからプロレタリアートがシュラヒタの歴史的課題をみずから引き受けること——これはわが国の無力な小ブルジョア民族主義の時代遅れの亡霊どもが望んだことである——ができるというような結論は決して引き出されえない。シュラヒタの歴史的課題とは階級国家としての存在をポーランドにもう一度回復するということであるが、これはシュラヒタ自身がとうの昔に放棄してしまった課題であり、わが国のブルジョ

アジーがみずからの発展によって不可能にしてしまった課題である。しかし、わが国のプロレタリアートは、存在と発展のための権利を持っている独特な精神文化としての民族性の擁護のために闘うことができるし、また闘わなくてはならない。そして、今日では、わが民族性の擁護は、分離主義的民族主義によってではなく、専制主義を転覆し、西ヨーロッパがすでに長く享受している形態の文化的・市民的生活を國中いたるところにしっかりと確立するための闘争によってのみ可能となる。

したがって、まさに独立のための努力が葬り去られた後に資本主義とともに成長してきたポーランド・プロレタリアートの純粋な階級運動が同時に政治的自由、民族文化の自由、市民的平等、ポーランドの自治などを実現するための最善にして唯一の保証を与えるのである。それゆえ、純粋に民族的な視点からみても、労働者階級の運動をひき出し、拡大し、促進するのに役立つようなすべてのものが、この言葉の真の意味において愛国的・民族主義的要素として理解されねばならない。反対に、階級運動の発展を制限し、妨害する一切のもの、それをおくらせたり、中止させたりする一切のものは、民族問題という視点からみても、恥ずべき、敵対的な要因とみなされねばならない。この観点からみれば、古い民族主義の伝統を育成したり、ポーランド労働者階級を階級闘争の道からポーランド再興というようなユートピア的愚行へとひきずりこもうと努力すること——すでに12年間にわたって社会愛国主義者たちがやってきたこと——は、その一見民族主義的な性格にもかかわらず、根底において全く反民族主義的な政策なのである。

国際社会主義という帆をかかげて航行している社会民主主義は、この国際社会主義の船の上で、ほかならぬポーランドの民族文化的遺産を守っているのである——これが、史的弁証法の今日の結論であり、この弁証法を理解し、予見し、行動の中へ取入れることを可能にするのが、まさに歴史研究におけるマルクス主義的方法なのである。

<原 注>

(一) 十一月蜂起の五十周年記念のために『ルフノシチ』編集部によってジュネーブに召集された大会での報告。

NEW. 19. S. 240f. 邦訳『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 236ページ。

(二) I. c. S. 80~81。

(三) ロンドン大会の決議は次のようなものであった。「本大会はあらゆる民族の完全な自決権を支持し、現在、軍事的・民族的もしくはその他の専制主義の圧制のもとに苦しんでいるあらゆる国の労働者に同情を表明することを宣言する。また本大会は、これらすべての諸国の労働者に対して、全世界の階級意識ある労働者の戦列に加わり、彼らとともに国際資本主義の打倒のため、また国際社会民主主義の諸目的達成のためにたたかうようよびかける」。

(“Verhandlungen und Beschlüsse des Internationalen Sozialistischen Arbeiter-und Gewerkschafts-Kongresses zu London vom 27. Juli bis 1. August 1896,” Berlin 1896, S. 18.)

(四) 1894年の『プシエドシフィト』11号の社説は次のような特徴的な一節においてこのことを最も明瞭に定式化している。「わが国には、真に我々の綱領の基盤の上に立っている人もいるし、ただ観念の上でだけそうしている人もいるが、しかし、いずれも次のような条件を付している。すなわち、独立ポーランド共和国を求め我々の全努力において、ロシアにおける立憲的運動の成功の見通しは、ただロシアにおいて強力な蜂起がある場合にのみ可能であるから、我々は、憲法をかちえようと思えば、この運動と結びつき、それと共に闘うべきだということを忘れてはならない。他の人々はさらに進んで次のように言っている。なるほど独立はポーランド労働者にとって必要なものであり、おそかれ早かれポーランド労働者がそれを獲得しなければならないのはたしかであるが、しかし、それを獲得するためには何よりもまず立憲的自由を手に入れなければならない。我々が労働者大衆を組織できるようになった時にはじめて、我々は政治的努力の最終目標——つまり民主主義的共和政めざして努力することができるであろう、と。すでに述べたように、これらの見解の主張者たちはまちがっている。もし彼らが我々を同志とみなし、我々の独立の要求に同意するとすれば、それはただ彼らがこのような方策のもたらすあらゆる帰結を考えぬくだけの努力を払っていないという理由からである。憲法を獲得しうるだけの力の存在が信じられない時に、一体どのようにして憲法のための闘争というようなふたしかな運動を綱領の中へ採り入れることができようか。しかも、我々のところにおけるこの不信はますます強くなり、今日の政治綱領の成立以来とりわけそうである。さらに、「ひょっとすると実現するかも知れない」憲法の信奉者たちは、ロシア社会の反動的な本質とロシアにおける社会主義的要素の弱さについての自分たちの信念を、自分たちの努力とどのように

一致させることができるのであろうか——とりわけ、これら二つの要素を結合してみれば、始めからロシアにおいては立憲的自由はさして重要なものとならないか、あるいは決して存在することはないだろうという結論がひき出されるのであってみれば、ともかく、我々の議論の中でロシアの反動的な本質という議論ほど我々の同志の人気を博したものはないのである。」

(四) ヴェリンスキ・グループの政治的立場の一連の変化については、我々はとりわけ「『プロレタリアート』党を記念して」と題する論文の中で取扱った。

(五) 近代ポーランドの「民族的ユーモア」について研究する未来の歴史家は、社会愛国主義の出版物の中に測り知れない程の貴重な宝物を見出すことができるであろう。我々はとりわけ次のような真珠をその完全な形で提供することにしよう。「もしシャイブラー社が、カルムック人やキヴェアへのペルカルの販売から今日得ている数百万の利益を失うことがあろうとも、我々はそれを悲しみはしないであろう。さらにポーランドの工場生産物のための販売市場が減少するために、かなりの数の労働者が仕事を失わなければならないとしても、我々はそのために独立を断念することはしない。議会にしかるべき法案を提出することによってこれらの貧困者を救済するために努力すること、労働時間の短縮、労働の権利等のためのアジテーションを行なうことが、ポーランドの社会主義代議士たちの未来の仕事となるであろう」。(以下省略)

(六) そのうえ、この転換はポーランド問題に関してのみならず、労働運動内部の民族主義的傾向一般についてもみられるところである。今日ではこの民族主義的傾向は、明白な不興を買っているか、——それが必要とされるところでは——鋭く拒絶されているのである。

ベーメン地域の国家的独立の問題は、すでに1898年の終りに『ノイエ・ツァイト』で研究された。その中で、カール・カウツキーはオーストリア社会民主党の原則と戦術の観点から、きわめて鋭い形で、当時E・スタムプファーとかいう人物によって主張されていたこの要求にきっぱりと敵対したのであった。カウツキーの当該論文を見よ。Die Neue Zeit, Nr. 10 und 16, 1898/99. Band I.

トリエストとトリエントにおけるイタリア人分離主義者の試みとそれに対応したイタリアにおける民族主義的傾向は、1905年5月のトリエストにおけるイタリア社会主義者の党とオーストリア社会主義者の党の特別な会合をもたらした。そこでは、とりわけオーストリアのヴィクトール・アドラーとイタリアのビソラティの参加のおかげでこの民族運動に対するあらゆる連帯と支持とがこの二つの政党によってはっきりと拒否されたのである。

アルメニア社会主義者の一部の分離主義的傾向に対しては、カウツキーが『ライプチガー・フォルクスツァイトゥング』紙、1905年5月1日号の浩瀚な論文において反対を表明している。

最後に、最近一週間に起ったきわめて特徴的な現象——ガリシアの党とポーランド人組織内部のユダヤ人社会主義者たちの分離主義的潮流との猛烈ななぐり合い——は全く滑稽なものである。彼らはプロイセン領およびロシア領ポーランドのPPS——周知のようにその分離主義はガリシアの党の指導者によって支持されている——の軌跡へと忠実に方向転換し、部分的には、この党の論拠を利用することにより、ガリシア・プロレタリアートの全体党から脱退し、かくして社会愛国主義の支持者たちにメダルのもう一方の側面——すなわち彼ら自身の傾向の当然の帰結であるますます増大するプロレタリアートの分裂という現象を見ることを可能にさせている。自分たちを脅かしているこのような潮流の克服のために、ガリシアの党は全オーストリア社会民主党の権威に助けを求め、この党から分離主義者——ユダヤ人分離主義者——に対する呪詛の言葉を手に入れているのだ。

<訳 注>

- ① Jean Jaurès (1859—1914) フランス社会主義運動と第二インターナショナルの主要な指導者の一人。ローザ・ルクセンブルクにより修正主義者としてたえず批判された。
- ② 1902年4月にベルギー労働者は参政権獲得をめざしてゼネストを行なったが成功しなかった。
- ③ 1866年にカラコーゾフは、ロシア皇帝アレキサンダー二世の暗殺を試みたが成功しなかった。
- ④ Tkačev (1844—1885) ニヒリスト。スイスで発行していた「ナバト」(「警鐘」)の中でとりわけブランキズム理論を展開した。
- ⑤ Vorbemerkung zu der Broschüre “Soziales aus Rußland”. NEW. 18. S. 585. 邦訳 18巻 581ページ。
- ⑥ Równość (「平等」), プロレタリアート党の直接の先行者たちの政治グループの出版物。
- ⑦ 「ルート, ポルスキ (Lud Polski)」は「ポーランド人民」, 「ポブートカ (Pobudka)」は「起床ラッパ」の意である。
- ⑧ Limanowoski (1835—1935) ポーランドの社会愛国主義者。“Lud Polski”の創設者の一人でありPPS創立大会の議長でもあった。
- ⑨ S. Häcker, “Der Sozialismus in Polen : Eine Entgegnung” Die Neue Zeit, Jg. 14. Bd. 2, 1895/96. Nr. 37, SS. 324—332.
- ⑩ 「プシェドシフィト (黎明)」, 1881—90年にジュネーヴで, 1890年にライプチヒで, 1891—92年にロンドンで, 1892年秋から1893年春まではパリで, その後1901年4までは再びロンドンで, さらに1905年まではクラクフで発行された月刊

誌。1881—92年の間は第一次、第二次プロレタリアート党の機関誌、1893—99年はZZSPの機関誌、1900年以降はPPSの正式の機関誌。（邦訳『ヨギヘスへの手紙』第一巻。P. 122.注(8)参照）

- ⑪ Zygmunt Miłkowski (1824—1915) 筆名 T. T. イェシ。作家、1848年と1863年の蜂起のメンバー。「有機的労働」のイデオログの一人。ポーランドの主要な課題は工業化であって、独立は第二義的なものだと主張した。
- ⑫ MEW. 22. S. 282f. 邦訳、22巻、289—290ページ。
- ⑬ “Historia ruchu społecznego w drugiej połowie XVIII stulecia” Lemberg 1888 und “Historia ruchu społecznego w XIX stuleciu” Lemberg 1890.
- ⑭ Karl Kautsky “Finis Poloniae?” Die Neue Zeit, Jg. 14, Bd. 2, 1895/96. Nr. 42. SS. 484-491, Nr. 43. SS. 513-525.
- ⑮ S. G. “Die industrielle Politik Rußlands in dessen polnischen Provinzen”, Die Neue Zeit, Jg. 12. Bd. 2, 1893/94. Nr. 51. SS. 787-792.
- ⑯ Ferdinand Lassalle “Herr Julian Schmidt der Literaturhistoriker” 1862.
- ⑰ Lenin, “Die nationale Frage in unserem Programm”. Werke, Bd. 6. Berlin 1968.
- ⑱ “Aus dem literarischen Nachlaß von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle,” herausgegeben von Franz Mehring. Bd. 3. Stuttgart. 1902.
- ⑲ GW. I/1 S. 197. 肥前栄一訳、149ページ。
- ⑳ GW. I/1 S. 211. 同上 171—172ページ。
- ㉑ “Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte” MEW. 8. S. 115. 邦訳 8巻 107ページ。